1935（昭和10）年7月1日

『家の光』7月号が発行部数100万部を突破する（その1）

～家の光編輯部長 有元英夫「百萬部發行の悦び」を語る～

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

1935（昭和10）年の『家の光』7月号は遂に発行部数が100万部を突破した。当時の編輯部長の有元英夫は「百萬部發行の悦びを迎へて」という記事を掲載。今回は、めったに目にする機会がないので掲載記事全文を掲載する。その喜びようを感じ取るとともに、『家の光』に対する有元の姿勢をみてほしい。

有元英夫 家の光編輯部長が掲載した『家の光』100万部突破の悦びの声をみる

1935（昭和10）年の『家の光』7月号の発行部数が100万部を突破したことを受けて、当時の家の光編輯部長であった有元英夫氏が本誌見開きで悦びの声を掲載している。

『家の光』1935（昭和10）年7月号の表紙

百萬部發行の悦びを迎へて

發行部数日本一

家の光は、いよいよ七月號（ごう）で百萬部を完全に發行することができた。現在我國の雑誌で百萬部以上を毎月發行するものは他に絶對にない。この意味で家の光は雑誌界に

おいて日本一の榮冠をかち得たことになる。百萬部の雑誌と、ただ口で言へば何でもないやうであるが、これを積上げて見ると、富士山の實に三倍の高さとなるのである。

家の光は大正十四年の四月に創刊されたから、丁度本年は創刊満十周年に相當する。つまり十周年のお芽出度と、百萬部發行のお芽出度とが一度に来たわけである。創刊當時は僅々二萬部内外の發行部数に過ぎなかつた家の光！　創刊當時からこの仕事にたづさはる私どもは、この歓喜二重奏を迎へて何とも言はれぬ愉快を感ずるのである。

五ケ年計畫を二年半で

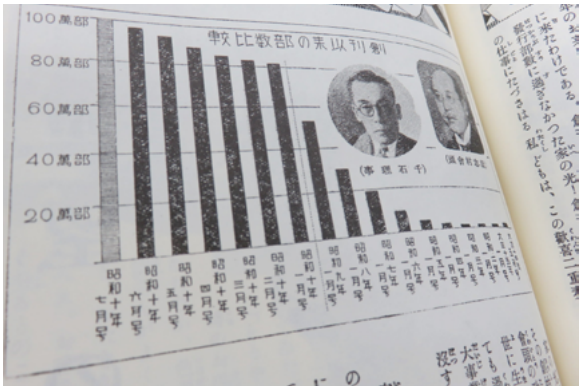
昭和八年に家の光百萬部發行五ヶ年計畫を樹立したが、その頃の發行部數は約三十萬部であった。それを五ヶ年間に三倍に増大することを發表した時には、世間では寧ろその無謀を嗤つてゐた。仕事をしてゐる私どもにも、實は確たる自信はなかつたのである。それが、五ヶ年を待つまでもなく、二ヶ年半で目標部數に達したのである。かうした家の光の大飛躍は、要するに關係各位ならびに全国の讀者諸彦の熱烈な支援の賜であることは言ふまでもない。

忘れられぬ恩人

家の光が今日の大をなすに至つたについては、その創始者ともいふべき産業組合中央會の故志村會頭の功績を忘れることはできない。本誌がこの世に生れ出たのも全く故志村會頭のお蔭だといつても過言ではない。また故志村會頭を輔けてこの大事業を完成された現千石常務理事の功績もまた没すべからざるものがある。

洋々たる家の光の将来

家の光は決して現在の百萬部發行に滿足するものではない。更に百五十萬部、二百萬部といふ風にますます進展し、名實共に日本一の大雑誌として九千萬國民に文化的糧を供する使命と抱負とを有してゐる。現在家の光の普及は主として農村に限られてをり、この方面でもなほ開拓の餘地が頗る大であるが、更に今後都市方面の普及が活況を呈するやうになれば、實に家の光普及の前途は洋々たるものがある。こゝに百萬部普及と創刊十周年の悦びを迎ふるにあたつて、讀者諸彦の一層のご援助をお願する次第である。



大正14年5月号（グラフ右端）から、100万部を達成した昭和10年7月号までの部数比較表

有元の苦労と100万部へ導いた牽引力

「百萬部発行の悦びを迎へて」は有元にしか書けなかった、といっても過言ではない。なぜなら『家の光』の発行を企画したのは有元自身だったからである。

有元はもともと岡山県農会で大衆雑誌『農家の友』を刊行した経験を持ち、当時中央会主事であった千石興太郎がその経験故に有元を中央会に呼び、会報『産業組合』の編集に当たらせたのである。『産業組合』の対象が組合経営者であったことから、有元は組合員教育のためには、別に大衆雑誌の性格に徹底し、しかも教育的価値のある雑誌とすべきであると考えた。有元は「家庭雑誌発行に関する計画案」を作成、千石はこの案に同意し、慎重な態度をとっていた志村会頭に熱心に説明して、承諾を得た。

そこで産組中央会は、1925（大正14）年2月14日の「道府県支会役員協議会」に「通俗家庭雑誌『家の光』発刊の件」を諮った。しかし「中央がこんな通俗雑誌など出すものでない」などの強硬意見が出て、容易にはまとまらなかった。すなわち、「だがしかし、志村会頭により、『雑誌発行によって欠損するような場合には、自分の私財でも補填して中央会には迷惑をかけない』との発言があり、ようやくまとまったのである」。

こうした苦労をしてきた有元だから「十周年のお芽出度と、百萬部のお芽出度とが一度に来たわけである」「この歓喜二重奏を迎へて何とも言はれぬ愉快を感ずるのである」と喜びを素直に表現するとともに、自らの構想を実現させてくれた故志村会頭と千石常務理事に心から感謝したのである。

最後に都市方面への普及に言及し、「家の光普及の前途は洋々たるものがある」と『家の光』の更なる発展図を描いてみせた。有元の構想力、構想を実現させる交渉力、日本一まで上り詰め、さらに発展させようとする推進力等々には脱帽するしかない。

＜参考文献＞

『家の光』昭和10年7月号
『ＪＡ教育文化・家の光ニュース』2020年7月号（第55回「協同の歴史の瞬間」